角川文庫
—3990—

狂信

ブラジル日本移民の騒乱

高木俊朗

角川書店

昭和五十三年一月三十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

狂信

著作者　高木俊朗

発行者　角川春樹

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(263)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

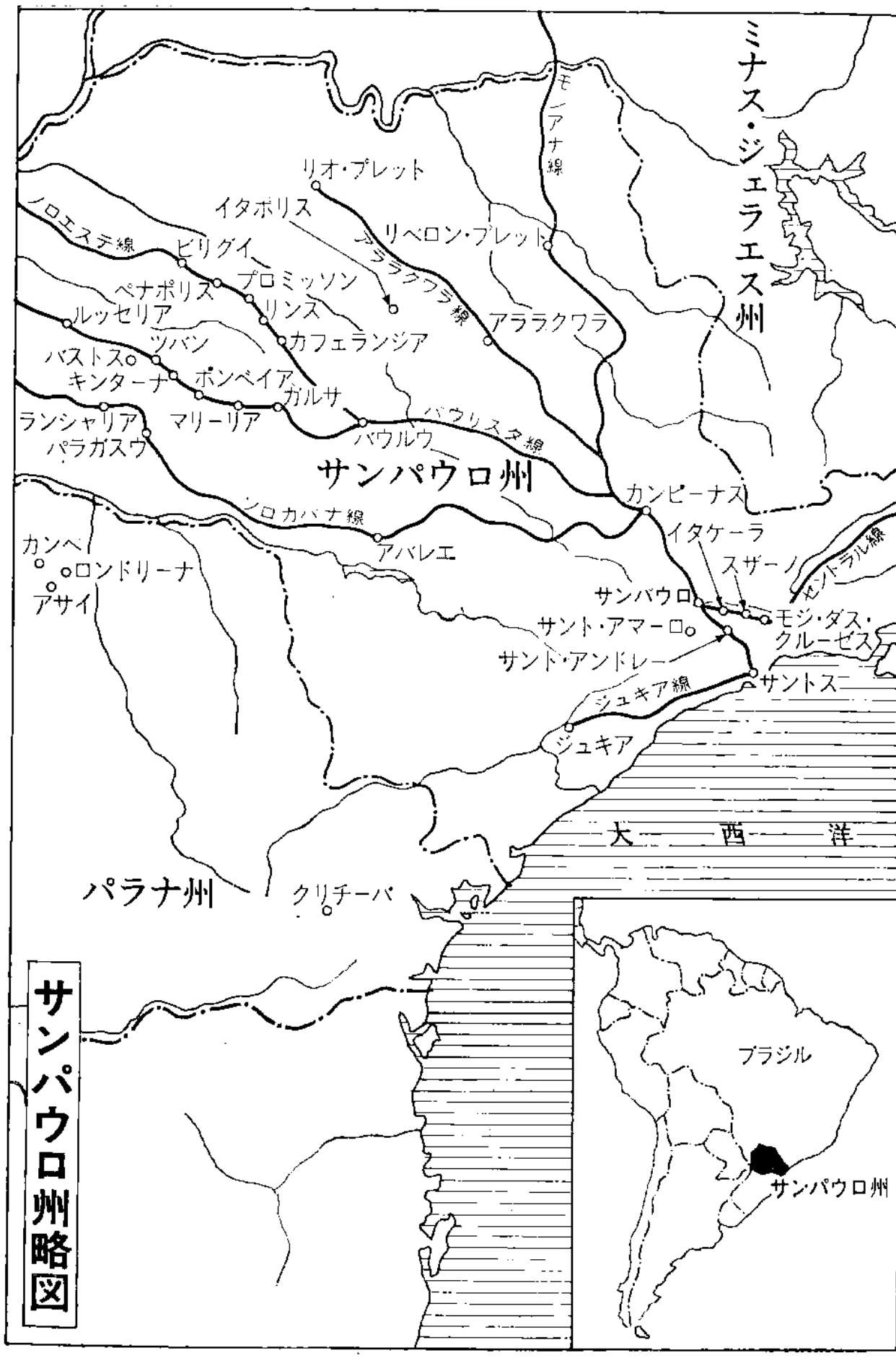
Printed in Japan　旭印刷・本間製本

0193-134502-0946(0)

狂　　信

ブラジル日本移民の騒乱

高　木　俊　朗



サンパウロ州略図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

警告　七
襲撃　一八
暗殺の朝　三五
怪文書　六三
踏絵の拷問　九八
監視の目　一四一
詔勅は偽物　一八六
特務機関　二〇二
暗殺と騒乱の事件簿　二四〇
華麗な赤の広間　二七五
危険な日本人　二九〇
変容する犯罪　三一〇

臣道連盟本部　三四三
決　闘　三六四
欺かれた努力　四〇〇
あとがき　四一八
文庫版あとがき　四二一
解　説　扇谷　正造　四三三

警　告

一

私は、非常に危険な立場にあることを知った。私の最初の訪問客が、その奇怪な話をもってきた。私がブラジルのサンパウロ市についた、その翌朝のことであった。

小肥りの男だった。背が低いのに、肩をいからすようにして、私の部屋にはいってきた。小さな口ひげをつけて、くせのある月つきをしていた。名刺には『サンパウロ・マガジン代表　千葉武男』としてあった。

千葉は赤い箱のたばこをさしだして、すすめた。

「こっちでは、売れているたばこですよ」

千葉は、せかせかした調子で、たばこをすいながらいった。

「あんた、気をつけないと、あぶないですよ」

私がブラジルに行ったのは、映画製作の仕事のためであった。昭和二十七年三月のことであった。日本では、十勝沖地震や、日航機の三原山衝突などの事件の起ったころであった。

千葉の話では、その映画製作はむずかしいだろう、というのだ。第一には、その資本金が集っ

ていない。第二には、その会社の社長や製作者がいかがわしい人物だ、というのだ。

社長というのは、土地会社を経営している宮村季光であった。製作者は沢井天城という田舎まわりの興行者で、自分で映画の弁士をしていた。このふたりが移民史映画の製作を企画して、トーキブラスという会社を作った。しかし、これは事務所だけの映画会社であった。撮影所や機械は、ブラジル人の映画会社から借りることになっていた。そして、監督、脚本、俳優などを、日本から呼んだ。

千葉の話では、トーキブラスの資本金五千コントスは、全然払込まれていない、という。コントというのは、ブラジルの通貨の単位で、当時、一コントは日本金の一万円に相当していた。

宮村は、出資するはずの五千コントスができなくなった。それは宮村の土地会社の不正を暴露されて、訴訟騒ぎになっているためである。

宮村は奥地のパラナ州のアプカラナ市で、宮村植民土地会社を経営していた。昨年から、北パラナの土地を〝ドラード植民地〟と名づけて売出した。宮村は、ここに新天地を建設するとふれこんで、大がかりな宣伝をつづけていた。

ところが、これに不正がある、と、新聞に暴露された。それによれば、宮村は州政府からドラードの土地の払下げの権利を得たといっているが、州政府は否定している、という。つまり、宮村は、自分に権利も資格もない土地を売出したのだから、全くの詐欺であるわけだ。

そればかりでない。宮村は大きな土地や財産をもっていると称しているが、実際に登録してある所有地は、わずかに一ロッテ、価格にして八十コントスにすぎない。

私は、このような話をする千葉の真意をつかみかねていた。早口にしゃべるその唇(くちびる)には、切傷のあとがあった。私は、この男が『サンパウロ・マガジン』という雑誌を持歩いて、金をかせいでいるとしたら、うかつなことはいえないと思った。

恐らく、沢井天城のところに行って、私のいったことを、そのまま話すに違いなかった。

しかし、千葉の話は重大であった。資本金がなければ、映画の製作はできない。私といっしょに、監督の小杉勇や俳優団は、もうサンパウロ市に到着している。ここで、相手が幽霊会社ということになったら、大変な問題になる。

「宮村が金をだせない時には、沢井天城がだしませんか」

千葉はすこし斜視の目をけわしくさせて、

「沢井は金なんかありませんよ。宮村にうまいことをいって、金をださせることにしただけだ。製作費どころか、生活費もらくじゃないでしょう」

「日本に沢井の使いできた男の話では、いままでにも、映画の製作をしていたような」

「うそっぱちさ。鈴木ですか、そんなことをいったのは」

今度の企画をもって交渉にきた鈴木の話を、小杉監督や俳優たちは疑わなかった。しかし、私は鈴木の話しぶりから、信用できないものを感じていた。それだけに、いま、千葉の話を聞いても、あわてることはなかった。

「沢井は何をしているんですか」

「いまは八ミリのカメラを持って、奥地の成功者のファゼンダ（農園）などを撮影しているら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しいな。前には、シネマ（映画）の弁士をやっておった。ブラジルにくる前は、浪花節語りで、中国やマレーを巡業して北米にわたったといってましたよ。それから、曲馬団をもってハワイに行って、ひどいご難をくって、ブラジルに逃げてきたらしい」

私は沢井の前歴を聞いて、不安を感じた。これでは、たとえ宮村の資金ができたにしても、沢井と仕事をするのは危険なように思われた。

私は早急に、宮村や沢井の実情を調べようと思った。宮村の不正を暴露したのは、日本語新聞の南米時事であった。そこに行って、暴露記事を読むのが、何よりの早道であった。

私はバロン・デ・デュプラット通りの南米時事に行った。メルカードと呼んでいる市営の食品市場の近くで、ごみごみしたところであった。

新聞社は小さな二階建てであった。せまい、きたない部屋には、四、五人の日本人がいるだけであった。私は編集部の大道直一に会って、宮村の会社のことをたずねた。記事を書いたのは、大道であった。パラナ州の現地には、二、三日前にも取材に行って帰ってきたところだった。

「宮村というのは、どういう男ですか」

「とんだ食わせ者ですよ」

大道は率直にいった。

「ブラジルでは、土地売りをやっているのは、ほらふきの悪いやつが多いんです。宮村は、すこし前までは、偽の歯医者をしていたんです。資格も、登録もないんです。二ヵ月ばかり、見習いをやっただけです。それを、サントス市随一の歯科医で、技工師を三十名も使っていた、と自

称していたんです。その上、治療代が途方もなく高くて『払えないから待ってくれ』というと、畑のものをだせ、米をだせと取立てる。そのうち、宮村の治療した歯がうんできて、問題になった。これで、免許状をもっていないことがばれると、すぐに治療の機械をかくしてしまったのです」

このような偽者が横行するのも、ブラジルという広大な植民地の、未開の一面をあらわしているようであった。大道は語りつづけた。

「パラナへ行くと、宮村のいろんな話があるんですよ。歯医者になる前は、自分の父は日本の外交官の宮村大使だといって、ブラジル人を信用させていたっていいますよ」

私は暗い気持になった。このような男とは、いっしょに仕事をすることはできない、と思った。大道の用意してくれた新聞のとじこみを開くと、《疑惑深まる、宮村植民土地会社》という大きな見出しが目についた。

それは昭和二十七年二月八日の記事であり、そのあと、三度にわたって続報があった。

さらに私をおどろかせたのは、五日前の最近の記事であった。その見出しには《宮村植民土地会社は、存在しない幽霊組織》としてあった。

大道がパラナ州政府の登録を調べてみると、宮村季光の名はあっても、会社の名は見当らなかった。会社が登記されていないのでは、州の土地の払下げをうけられるはずがなかった。

宮村は、この記事に対し、取消しを要求し、南米時事に対し、暴力団まがいの脅迫をしているということであった。

大道は、古風な八字ひげをつけていた。年は、まだ若いようであった。

大道は私に注意をした。

「われわれは、あなたがたをお気の毒に思っているんです。ひと筋なわではいかないやつだから、気をつけたほうがいいですよ。それにしても、こっちへきてしまったのは、まずかったですな。日本で、出発前にわからなかったのですか」

私は沢井の代理として交渉にきた鈴木のことを話した。鈴木は、こうした事情を知らないはずはないと思われた。大道は、

「鈴木なんかだめですよ。勝組の男で、沢井と、一つ穴のむじなですよ」

と、不快そうな顔をした。私は出発前に、鈴木を信用できないので、別の方法で調べようとした。そのために、つてを求めて、ブラジルに派遣されているという日本ボーイスカウト連盟の財務委員の島田利次に依頼した。ところが、返事がこなかった。そのことを大道にいうと、

「それでわかりました。その男は、あなたの手紙をもち歩いて、映画の仕事もするようなことをいっています。あの男の名刺には、朝日新聞社会部長としてありました。われわれは相手にしませんが、このごろ、日本からくるのも、おさい銭かせぎの変なのが多いです。日本ボーイスカウト連盟までが、ああいう男をよこして、寄付を集めているんです。こじき根性ですな」

私は、思わぬ手違いになっているのを知り、自分の安易なやり方を後悔した。大道は、

「こんなことになるだろうと思っていました。私は同情していますから、あなたがたのことを書かないようにしています。しかし、こっちの新聞には、あなたがたにそっぽをむいているのが

あるから、注意してくださいよ」
「どうして、そっぽをむくんですか」
大道は答えないで、別のことをいいだした。
「あなたがたは、どうして時報の黒石の家にいるんですか」
われわれはサンパウロ市につくと、伯刺西爾（ブラジル）時報という日本語新聞の社長、黒石清作の家につれて行かれた。そこが、当分の宿舎だというのだ。私は沢井天城に、約束と違うことをただした。鈴木の持ってきた話では、サンパウロ市一流のホテルにとめるということになっていたのだ。
沢井天城は、のどのつぶれた浪花節声で、
「ホテルは、言葉が通じないと、ご不自由と思いまして、黒石さんにお願いいたしましたです」
と、妙にいんぎんに答えた。
大道は、この話を聞いて、笑いを浮べた。
「みんな、はじめからの筋書ですな。宮村と沢井、沢井と黒石、みんな同類ですよ。それにしても、黒石の家にいるのはまずいな。その上、あなたがたのシネマは、時報が後援しているしね」
私は大道の言葉に、重大な警告と、好意のこもっているのを感じた。私は、この危険な事態に、早く対策をたてねばならないと思った。

二

私は小杉監督に宮村や沢井のことを話して、対策を促した。

もともと、沢井が小杉監督を呼ぶことにしたのは、ふたりが宮城県出身の、同県のよしみというにすぎなかった。それだけに、この製作を中止することはたやすかった。しかし、すでに契約をかわし、旅費を支給されてきたから、簡単に解決することはできそうになかった。

ことに、四人の男女優を、傷をつけないで日本に帰すには、慎重に、ことを運ばなければならなかった。まして、相手の宮村は、南米時事を脅迫するような、したたか者である。うかつなことはできなかった。

沢井のほうも、われわれを待たせるばかりで、仕事を始める様子がなかった。むだに滞在の日が過ぎて行った。

そのうち、サンパウロ市にある日本総領事館から、われわれに招待がきた。石黒四郎総領事が、夕食をいっしょにしたいということであった。

われわれは、日本からきた映画人というので、在留邦人から、毎日のように招待がきていた。私は、それと同じように考えて、コンセレイロ・クリスピアーノ通りの総領事館に行った。

石黒総領事はこげ茶色の服を着て、ものなれた態度で、われわれをくつろがせた。

「私はリオに行っていたので、お招きするのがおそくなりました。日本から一流の俳優さんたちがこられたので、ぜひ、お目にかかりたいと思っていました」

石黒夫人は、霧立のぼると新井麗子のふたりの女優と、すぐにうちとけて話をした。

「とても、おきれい。こんなきれいな着物姿を見たら、こちらの日本人もブラジル人も、大喜びでしょう」

「お呼ばれというと、着物でくるようにって、ご注文がありますの」

霧立のぼるが色の白い顔に、はなやかな笑いを浮べた。女優たちは、そでの長い訪問着をきていた。

石黒総領事は小杉勇、藤田進、大日方伝と話しあっていた。テーブルには、ウイスキーとブラジル風の料理がならんでいた。

私の隣には、柔道家のような、肉の厚い野崎正勝領事が腰かけていた。

「私は、帰朝命令が出ていましてね、正式にはここの人間じゃないようなんですが」

野崎領事はこだわらない調子でいった。

「ブラジルは長かったんですか」

「いや、おととしの十二月だから、一年ちょっとです。何しろ、戦後は日本政府の領事館をおけなくて、その代りに在外事務所というのを開いたのが、おととしの二十五年からです。今度の講和条約で、ようやく、領事館になりました。だから、総領事も、まだこられたばかりです」

「戦後は、めんどうが多かったでしょう」

「ブラジルのほうはなんでもなかったんですが、日本人のほうが大変のなんのって。何しろ、私がきた当時は、例の勝組で大騒ぎでした。在外事務所ができたら、すこしはおさまるかと思っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com